

第5章 総括

本書では、古天神古墳から出土した遺物群の資料化、ならびにそれをふまえた研究を実施した。ここでは、得られた成果を総括することを通して、出土遺物からみた古天神古墳の築造年代を明らかにし、古墳の築造背景とその意義について評価を試みることにしたい。

1. 出土遺物について

(1) 出土の経緯

本書では古天神古墳の出土遺物についての網羅的な資料化・報告を目的としたが、遺物の出土経緯が複数におよぶ点をまずは強調しておきたい。出土の経緯の違いは、東京国立博物館所蔵品と島根大学所蔵品として、収蔵状況の差として現状では把握されるが、東博資料と島大資料とで同一品目でも相違点が目立つものがみとめられる点に注意をうながしておきたい。たとえば、鉄鏃は東博資料と島大資料のそれぞれは特定形式にまとまるが、両機関に共通する形式は基本的には存在しない。同様に、刀子についても、東博資料は大型品が目立ち、島大資料は中型品にほぼ限定されており、収蔵状況の違いが形式差と対応するようすがうかがわれる。

いっぽうで、東博資料と島大資料の接合関係が大刀Bと大刀Eで確認されることは、古天神古墳における副葬品の回収が複数回におよんだことを確実視させる。接合関係にはないが、同一個体とみられる雲珠・辻金具が存在すること、出土遺物の同時期性の強さも、当該資料群の一体性を保証するものといえるが、収蔵状況の差を出土地よりも上位のまとまりとして資料群を把握し、慎重を期しつつ研究と活用に資する姿勢が望まれるだろう。

(2) 出土遺物の年代と古墳の築造時期

古天神古墳の石室からはさまざまな副葬品が出土した。倭鏡をはじめ、金環・銀環、銀装円頭大刀を含む大刀、剣、短刀、刀子、砥石、馬具、須恵器を中心とした土器類である。このほか、石室内におさめられた副葬品ではないが、埴輪も少数ながら存在する。まずは、これら出土遺物の年代的な位置づけを確認し、古天神古墳の築造時期についての所見をまとめる。

倭鏡 倭鏡は旋回式獣像鏡系とよばれる後期倭鏡新段階の主力系列に属する資料である。今回、その位置づけを確認するため、当該系列の分析を試みた〔第4章2岩本論考〕。その結果、旋回式獣像鏡系は全体として4段階に細分でき、大きく2時期に整理しうることを明らかにした。1式は古墳時代中期後葉古相（TK208～TK23型式期）、2式は中期後葉新相（TK23～TK47型式期）、3式は中期末葉（TK47型式期）、4式は後期前半（MT15～TK10型式期）に副葬が始動する。1・2式を前半期、3・4式を後半期として大別することが可能である。古天神古墳例は末期型式にあたる4式に該当する。静岡県大門大塚古墳や兵庫県勝福寺古墳が製作時期の近い事例となろう。なお、古天神古墳の場合、倭鏡の製作時期が後述する想定される古墳の築造時期よりも大きく先行する。在りでの伝世もしくは倭王権による長期保有ののち、副葬されたものと理解できる。近隣に所在する御崎山古墳でも珠文鏡充墳系に属する倭鏡が出土しているが、縁部形式から旋回式獣像鏡系1・2式に併行する時期の所産と推定される。古天神古墳例よりも伝世・長期保有の期間がさらに長期におよぶ例と考えられ、出雲では伝世ないし長期保有例が銅鏡については目立つことを指摘できる。

大 刀 大刀のなかでも時期比定に適した資料は、銀装円頭大刀と銀象嵌装大刀であり、詳細な観察によってその位置づけを検討することが可能となった〔第4章3大谷論考〕。

銀装円頭大刀については、倭風大刀の流れにのる資料であるが、外来系大刀の要素もとり入れた特異な事例であるという。奈良県烏土塚古墳例→鳥根県上塩冶築山古墳例→静岡県宇洞ヶ谷横穴墓例→茨城県風返稲荷山古墳例（円頭大刀1）にみる倭風円頭大刀の変遷において、古天神古墳例は宇洞ヶ谷横穴墓例と風返稲荷山古墳例（円頭大刀1）のあいだに置くことができる。これら類例の位置づけは、出土した須恵器型式からおおよそTK43型式の時間幅のなかにあり、そのなかでも古天神古墳例はやや新しい特徴をもつ。とすれば、古天神古墳例の年代はTK43型式期のなかでも新相に位置づけられる可能性が高いと考えられる。

また、鳥根大学に収蔵される資料ではあるが、銀象嵌装大刀は鐔にハート形象嵌をもつ形式であり、年代をおさえる手がかりをもつ。類例の系列と型式を検討したところ、線充填系列の端部丸型に位置づけうる例として評価できることが明らかとなった。古天神古墳より先行する例には大阪府芝塚古墳があり、後出する例に福岡県牛頸梅頭1号窯跡や鳥根県鳥田池1区2号穴がある。前後する型式の出土古墳で確認される共伴須恵器の型式から、古天神古墳例はTK43型式期からTK209型式期の過渡的な時期のものと考えられる。

鉄 鍬 鉄鍬のうち年代の手がかりとしうるのは、頸部関と長頸柳葉形鍬の形態的特徴である〔第4章4土屋論考〕。まず、副葬鍬の各形式に共通してみられる棘状関によって、おおよその上限は須恵器というTK43型式期とみることが可能である。さらに、長頸柳葉形鍬にみる鍬身部の退化（刃部研ぎ出し範囲の縮小）と頸部幅の縮減に着目して出雲の他例と比較すると、古天神古墳例は岡田山1号墳、御崎山古墳、上塩冶築山古墳と近く、中村1号墳（う群）よりは古相を示す。出雲以外の例でみると、奈良県平林古墳、奈良県烏土塚古墳、奈良県藤ノ木古墳（TK43型式期）などと同じで、奈良県牧野古墳（TK209型式期）よりは古い特徴をもつことになる。

馬 具 馬具は環状鏡板付轡Aが小型矩形立聞金具に吊金具がともなう型式である。岡安光彦によるⅡ段階〔岡安1984〕、花谷浩の分類では小型方形立聞鏡板c類と引手B2から第2群〔花谷1986〕、田中祐樹の分類では吊金具接続法（立聞形態A）と連結方法Ⅲ（引手・銜共連法）からAⅢ型式〔田中2011〕に位置づけられる。その時期表現は、岡安Ⅱ段階がMT85型式期、花谷2群がMT85～TK43型式期、田中AⅢ型式はMT85～TK43型式期となる。類例が御崎山古墳や栃木県星の宮神社古墳、福岡県竹原古墳から出土している。

これにたいし、環状鏡板付轡Bは大型矩形立聞金具（回字形立聞）をもつ形式であり、岡安Ⅳ段階

年代の目安 (須恵器型式)	TK23・47	MT15・TK10	TK43 (出雲3期)	TK209 (出雲4期)
埋葬施設			御崎山	→ 古天神 → 伊賀見1号
倭 鏡	御崎山 →	古天神・中村1号 大門大塚・勝福寺		
銀装円頭大刀			上塩冶築山・岡田山1号 → 古天神 → 烏土塚・宇洞ヶ谷	風返稲荷山
銀象嵌装大刀			芝塚	→ 古天神 → 鳥田池1区2号穴
長頸柳葉形鍬			岡田山1号・御崎山・上塩冶築山・ 平林・烏土塚・藤ノ木	古天神 → 中村1号墳（う群） 牧野
環状鏡板付轡			御崎山・古天神A → 古天神B 星の宮神社・竹原	→ 川島・湯舟坂2号
金銅装雲珠			御崎山・ 烏土塚・竹原	古天神 → 福岡岩屋 川島・城山1号
須 恵 器	山代二子塚 →	岡田山1号・東淵寺・御崎山 中竹矢2号横穴墓	→ 古天神	・ 伊賀見1号 → 岩屋後・団原 中竹矢1号横穴墓

第88図 古天神古墳の構成要素とその年代的位

[岡安 1984]、花谷分類では立聞孔が立聞中央にあく長方形立聞鏡板 b 類と引手 B2 から第 3 群 [花谷 1986]、田中分類では革帯直接接続法 (立聞形態 C) と連結方法Ⅲ (引手・銜共連法) から CⅢ型式 [田中 2011] となる。岡安Ⅳ段階が TK209 型式期、花谷 3 群が TK209 ~ TK217 型式期、田中 CⅢ型式は MT15 ~ TK217 型式期までとするが、TK209 型式期を中心とした所産とみてよい。類例として福岡県川島古墳や京都府湯舟坂 2 号墳の諸例があり、湯舟坂 2 号墳では TK43 ~ 209 型式期にかけての須恵器とともに奥壁から出土している点が注目される。当該型式の轡は TK209 型式期と一律的に引き下げられる傾向にあるようだが、湯舟坂 2 号墳の組み合わせを考慮すると、その上限年代を TK43 型式期新相まで引き上げうる余地は十分にあらう。

雲珠は 8 脚以上の半球状鉢多脚系に該当し、責金具をとまなうものであり、辻金具も同じ特徴をもつ。類例が御崎山古墳、烏土塚古墳、竹原古墳、川島古墳などから出土している。宮代栄一の第 V 期 (TK43 ~ TK209 型式期) に位置づけられる [宮代 1996]。馬具には若干の時期差を想定できるが、環状鏡板付轡 A と金銅装鉢部半球形雲珠・辻金具が金銅装をもつ点や同じ組み合わせが多数確認されている点からも同じ馬装を構成したと考える [第 3 章 6]。とすれば、轡 A の馬装をおおよそ TK43 型式期の時間幅でとらえ、轡 B の馬装に TK43 型式期新相 ~ TK209 型式期との年代観を想定することが可能とならう。轡 A の馬装に轡 B の馬装よりもわずかに先行する要素がみとめられるが、二つの馬装はおおむね同時期の所産とみて差し支えないであらう。

須恵器 古天神古墳ではまとまった数の須恵器が石室より出土しており、築造年代を特定する材料としての有効性が期待されることから、各器種の年代的位置を検討した [第 4 章 5 岩本論考]。資料数の多い蓋坏については全体を 3 群に細分することが可能であるが、出雲 3 ~ 4 期にかけてのきわめて連続的な様相を示す資料群ととらえうる。高坏・提瓶も出雲 3 ~ 4 期にかけての特徴をもち、甗・直口壺は出雲 4 期に比定しうる内容をもつ。これらに積極的な時期差を想定し、それを追葬に起因するものとみることにも不可能ではないが、全体として過渡的な様相が顕著であり、短期間の資料群とみるほうが資料実態と整合的なようだ。古墳出土須恵器の様相比較では、古天神古墳より古相を示す例に岡田山 1 号墳、東淵寺古墳、御崎山古墳 (初葬) など (出雲 3 期)、新相を示す例に岩屋後古墳や団原古墳など (出雲 4 期) がある。もっとも近い様相を呈する例としては、中竹矢 1 号横穴墓や伊賀見 1 号墳などをあげうる。出土須恵器の様相は、古天神古墳 → 伊賀見 1 号墳 → 岩屋後古墳・団原古墳とする出雲型石棺式石室の定型化のプロセス [角田 1993 など] とも整合的であるといえる。

古天神古墳の築造時期 以上の出土遺物の年代から古天神古墳の築造時期について、追葬の可能性も考慮しつつ絞り込むならば、複数の遺物で年代観が共通する須恵器型式でいう TK43 型式期でも新相を示すとする理解をもっとも有力視できる (第 88 図)。いっぽうで、最新相である点をあくまでも重視するならば、TK209 型式期との時期表現も可能である。このわずかな時期差を追葬によるものとみることにもできるが、共伴する須恵器の位置づけが出雲 3 ~ 4 期にまたがりつつも凝集性の高いものである点をふまえるならば、その可能性を積極的に評価する必要は必ずしもない。須恵器に限らず、倭鏡を除く副葬品を総体としてみても、時的なまとまりはきわめて強いと評価しうる内容といえよう。このことは、埋葬施設内での遺体安置空間が 1 基分しかない点をもって古天神古墳を単次葬とみれば、遺構の特徴とも整合的なあり方を示すものと理解することもできる。しかし、こうした状況証拠から追葬がないと推断するよりも、出土状況を確認できない現状では追葬の可能性も含めて一定期間の幅のなかで築造年代をとらえておくのが適切であらう。したがって、本書では古天神古墳の築造年代を、須恵器型式の TK43 ~ TK209 型式期あるいは出雲 3 ~ 4 期のきわめて過渡的な様相を示す時期とし、古墳時代後期後葉ごろとみておきたい。

2 出雲型石棺式石室の成立背景について

出土遺物の総合的な分析により古天神古墳の築造年代の把握を精緻化した結果、もっとも大きな影響を受けるのは、出雲型石棺式石室の成立にかかわる議論である。それは、当地において古墳時代後期末葉以降に首長墓の埋葬施設として採用される出雲型石棺式石室がもつ歴史的意義を考究するうえでの重要な視角をもたらす。ここでは出雲型石棺式石室の成立をめぐる論点として、系譜と地域間関係についてとりあげておきたい。

系 譜 先行研究では、古天神古墳の石室すなわち出雲型石棺式石室の成立背景として、中九州や肥後からの直接的な受容を想定した〔山本 1964、角田 1993〕。その背景には、切石造横穴式石室としての出雲型石棺式石室の出現が山陰のなかではほかより確実に先行すると考えられてきた点が根拠としては大きい。しかし、本書で指摘するように、先行研究の想定よりも古天神古墳の築造年代がやや下降し、出雲西部の上塩冶築山古墳や伯耆西部の福岡岩屋古墳との時期差がほぼ解消されるのであれば、山陰における横穴式石室の切石化に共通した背景を想定することも可能となる。あるいは、出雲東部・出雲西部・伯耆西部で異なる形式の切石造横穴式石室が構築されている点をふまれば、石室の形態や構造とは関係なく、切石造石室の技術そのものが波及する状況を考える余地も生まれてこよう。その場合、形態・構造・技術を一体的にとらえることで析出してきた石室系譜の議論に少なからず見直しが必要になると考える。

上述した点をふまえて、本書では従来とは異なる理解が可能かを探るため、古天神古墳の埋葬施設の系譜について再検討を試みた〔第4章1岩本論考〕。古天神古墳の石室の形態・構造は、肥後南部の切石造横穴式石室よりも、出雲東部において先行して存在する北部九州系横穴式石室に近いことから、在地的展開をベースとしつつも切石技術の導入を創出のより直接的な契機として評価した。出雲型石棺式石室の出現を石棺製作の延長線としてのみ位置づけるのではなく、新たな技術の体系的な導入によって成立したとみたが、その理解が適切かは今後さらに検証される必要がある。なお、古天神古墳の石室の位置づけは、定型化した出雲型石棺式石室のプロトタイプとするのが妥当と考える。

地域間関係の展開 上記した出雲型石棺式石室の系譜にかんする理解の変更は、その成立にかかわる地域間関係の評価にも少なからず影響をおよぼす。先行研究では九州との地域間関係において出雲東部の主導性を強調してきたが〔山本 1964、角田 1993〕、本書では切石造石室の出現にみる連動性を考慮して山陰における諸地域の連携とそれぞれの主体性の存在を強調するに至った。

また、広域におよぶ地域間関係として、リアルタイムに北部九州から受容した横穴式石室ではなく、先行して受容した石室の在地的展開の過程において出雲型石棺式石室が成立したとする見方は、出雲東部と九州諸勢力との関係をときほぐす新たな視点をもたらす。すなわち、出雲型石棺式石室の成立前夜には、出雲東部と北部九州の関係は断絶に近い、あるいは少なくとも薄らぐような状況を想定する余地が生まれるのである。さらに、切石技術にみる共通性は、出雲型石棺式石室の成立段階に肥後南部との関係構築が新たに進展したことを端的に物語る。詳細な議論は今後委ねるが、当該期以降に切石造横穴式石室が日本列島の広域に波及する点は、山陰での切石技術の受容ともけっして無関係でないように思う。また、時期的な近似性からは、横穴墓の波及にもそれと連動性の高い背景が密接にかかわるとも推定される。より広い視野から当該期の墓制を追究する姿勢が必要といえよう。

以上、出雲型石棺式石室の成立背景にかかわる論点として系譜と地域間関係に言及したが、今後検討すべき課題は多岐にわたる。本書で示した理解を検証する地域的な視座はもちろん、議論の深化をうながすため広域におよぶ視点からの分析がなされることを期待する。

3 古天神古墳築造の背景と意義

(1) 築造の背景

築造背景を墓制にみる地域間関係から論ずるうえで無視できないのが、北部九州との関係性が埋没する時期に出雲型石棺式石室が成立したとみられる点である〔第4章1岩本論考〕。すなわち、古天神古墳の石室は、より古い時期に受容された北部九州系横穴式石室が出雲東部において在地的に展開したものをベースとしており、その築造背景に北部九州とのリアルタイムの関係性はみいだせないとする理解が成り立つのである。

こうした理解は、当該期の墓制にみる諸要素のあり方とも整合するところが多い。たとえば、埴輪は出雲東部・出雲西部・伯耆西部で同一系統と評価され〔田中2017〕、出雲型子持壺に端的に反映されるように須恵器も在地性を強める〔大谷1994、第4章5岩本論考〕。前方後方墳の築造もそうした動きが顕在化した結果とみてよいただろう。増大する在地性の到達点の一つとして、出雲型石棺式石室の成立を位置づけることが可能であり、そこに古天神古墳の築造背景を重ねるのである。

そのいっぽうで留意しておきたいのが、同時に広域性を帯びた副葬品が存在する点である。在地での伝世の可能性も否定できないが、この時期に出雲東部では銅鏡の副葬が目立ち、それは他地域に比べると後出的な様相ともいえる〔岩本2014〕。円頭大刀や銀象嵌装大刀といった倭風とみられる大刀も近畿地方を中心とした広域関係の産物とみてよかろう〔第4章3大谷論考〕。鉄鏃の地域性からは、そうした近畿地方との関係に加えて、吉備や美作との関係を想定することも可能であるようだ〔第4章4土屋論考〕。このように、副葬品には近畿—吉備・美作—出雲という広域のつながりが垣間見え、そうした動向は古天神古墳の築造に少し先立つ時期から出雲東部では顕在化する。器物の受容をめぐる社会状況が遷移したようすもうかがわれ、そこに新たな陸路の整備⁽¹⁾といった出雲をめぐる広域関係の変化をよみとることも可能であろう〔豊島2017〕。

古天神古墳の築造背景には、北部九州との強い関係からの脱却、それを受けての在地性の増大、器物と新技術の受容にみる近畿地方を中心とする広域との社会関係の変化が、複雑に絡み合う状況を想定できるのである。

(2) 築造の意義

あらためて古天神古墳の最大の特質を端的に述べるならば、それは出雲型石棺式石室の成立にみえるように墓制の画期をなす存在という点に尽きる。それゆえ古天神古墳の築造意義は、出雲型石棺式石室の成立前後の社会状況の変化によってもっとも鮮明に説明しうる。そして、そうした社会変化にたいするもっとも的確な射た評価こそ、「地域型石室」の成立とする理解であるといえよう〔大谷1996〕。首長墓における石棺式石室の採用だけでなく、横穴墓にみる石棺式石室の模倣は、古天神古墳の築造以降の出雲東部の墓制における一体性を端的に物語るからである。このように、少なくとも墓制からは該期に社会編成の質的な変化が想定され、出雲東部における地域的なまとまりは強化されつつあった状況がうかがわれる。古天神古墳の築造意義はそうした出雲東部社会の質的転換の萌芽になるものと評価しておきたい。

出雲地域はもとより山陰、さらには日本列島における古墳時代社会を論ずるうえで、古天神古墳は研究素材としてようやくその基礎的な情報が整備されたにすぎない。今後の議論の積み重ねによって、古天神古墳の学術的価値が高められることを願ってやまない。

註

(1) 吉備から美作を介して出雲をめぐる陸路の重要性については、豊島直博氏から示唆を受けた。

引用文献

- 岩本 崇 2014「銅鏡副葬と山陰の後・終末期古墳—文堂古墳出土鏡の年代的・地域的位置の検討—」『兵庫県香美町村岡 文堂古墳』大手前大学史学研究所研究報告第13号 大手前大学史学研究所・香美町教育委員会 pp.135-161
- 大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『鳥根考古学会誌』第11集 鳥根考古学会 pp.39-82
- 大谷晃二 1996「出雲東部の横穴式石室」『山陰の横穴式石室—地域性と編年の再検討—』第24回山陰考古学研究集会 山陰考古学研究会 pp.20-24
- 岡安光彦 1984「いわゆる「素環の轡」について—環状鏡板付轡の型式学的分析と編年—」『日本古代文化研究』創刊号 PHALANX—古墳文化研究会— pp.95-120
- 角田徳幸 1993「石棺式石室の系譜」『鳥根考古学会誌』第10集 鳥根考古学会 pp.69-103
- 田中 大 2017「出雲・伯耆西部における古墳時代後期後半の異系統円筒埴輪の融合」『考古学研究』第64巻第2号 考古学研究会 pp.82-98
- 田中祐樹 2011「造付立間環状鏡板付轡の出現と展開」『歴史民俗研究』第8輯—櫻井徳太郎賞受賞論集— 板橋区教育委員会 pp.1-46
- 豊島直博 2017「双龍環頭大刀の生産と国家形成」『考古学雑誌』第99巻第2号 日本考古学 pp.51-87
- 花谷 浩 1986「素環鏡板付轡の編年とその性格」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集 同刊行会 pp.239-276
- 宮代栄一 1996「鞍金具と雲珠・辻金具の変遷」『黄金に魅せられた倭人たち』'96特別展 鳥根県立八雲立つ風土記の丘 pp.48-51
- 山本 清 1964「古墳の地域的特色とその交渉—山陰の石棺式石室を中心として—」『山陰文化研究紀要』第5号 鳥根大学 pp.43-73